

### 3. 上北沢地区の課題と取り組み

#### 課題1 初期消火

##### ■意見

- ・スタンドパイプは、町会が1基、消防団がスタンドパイプ2基とD型ポンプを2台持っている。
- ・消防団の資機材は、消防団員しか使えない。
- ・スタンドパイプを使える人が何人いるか不明。
- ・スタンドパイプを使う消火栓の場所が分からない。
- ・消防団の防災倉庫には鍵がかかっている。
- ・消防団員は自営業、商店街の人がいるので少し安心である。
- ・小学生や商店街の人たちは訓練していない。
- ・18時30分発災の場合は、若い人が少ない。
- ・新しい住宅は隣家と間隔が狭く、火災時に危険である。
- ・ブロック塀が多く危険である。

##### ■地区としての今後の取り組みの方向性

- (1) スタンドパイプの訓練を行い操作できる人材を育成していく。
  - ・スタンドパイプは一人で操作できない(3人1組ぐらい)。
  - ・使い方がわかっても高齢者だと操作困難。
- (2) 街路消火器の場所、スタンドパイプの配備場所・消火栓の位置などを広く周知していく。
  - ・スタンドパイプの設置数を増やす。
  - ・日頃から、街路消火器をチェックする。
- (3) 参加者に合せた日時・時間帯に防災訓練を実施していく。
  - ・消火器体験。もっとたくさんの人に体験する機会を設ける。
  - ・学校の訓練等に参加していく。
  - ・少人数でも防災訓練を行っていく。
- (4) 日頃から家庭から火を出さない工夫をしていく。
  - ・家庭内や近隣で通報する人・消火する人などの役割を決めておく。
  - ・家庭内の初期消火を第一に考える。
  - ・家庭用消火器や街路消火器を使用し、協力して初期消火する。
  - ・背の高さを超えると初期消火は無理→初期消火の限界を知っておく。
  - ・避難経路を確保しておく。
  - ・家の前に燃えやすいものを置かない。
- (5) 各家庭で消火用の物品(消火器・バケツ・ホース等)を備えておく。
  - ・家庭での消火器を備える。PR・斡旋などを促進する。
  - ・家庭でも消火器をチェックする。
- (6) 災害時の危険箇所(火災・ブロック塀倒壊など)を把握し、情報共有しておく。
  - ・この地区は水害の心配はないが火災が怖い。

## 課題2 負傷者等の救出、救護

### ■意見

- ・上北沢5丁目には資材はあるが、使える人がいない。
- ・上北沢3丁目には人がいない。
- ・道具があるが使える人がいない。
- ・医療に不安がある。
- ・要介護の人の対応は、ヘルパーが力になる。
- ・上北沢ホームに日大（文理学部）が手伝いを行っている。
- ・救出するための若い人がいない。
- ・負傷者救出時に若い人がいなければ対応できない。
- ・負傷者の救出、搬出をどのような方法で行うのか。
- ・高齢者が多く、動いてほしいサラリーマン世代が戻っていない。
- ・しかし年齢等の状況把握が不十分である。

### ■地区としての今後の取り組みの方向性

- (1) 町会・自治会で、安否確認や救出救助の体制を整備していく。
  - ・高齢者の安否確認が必要。
  - ・組織をつくるには大きな組織でやったほうがよいのか。
- (2) 負傷者の救出・搬出に対応した資機材の訓練を行っていく。
  - ・資機材の場所の確認・周知をする。ヤマダ電機裏の町会倉庫にリアカーはある。
  - ・上北沢小学校の防災倉庫の中身を確認する。
  - ・丁目ごとに資機材倉庫が必要（上北沢3丁目は上北沢公園、4丁目は小学校）。
  - ・上北沢5丁目に倉庫が必要。場所がないから空き家を倉庫にする。
  - ・資材はどのようなものが必要か？（タンカ、ジャッキ、救急箱、リアカー）。
  - ・救護に必要な道具・資材の検討に合わせて、収納場所も検討していく。
  - ・道具・資材の場所や内容を周知していく。
  - ・資機材倉庫の鍵はどうするか？（鍵穴に悪戯されることがあるので、暗証番号がよい）
  - ・何がどこにあるのか、倉庫のカギを誰が持つかも検討していく。
  - ・一般の方でも資材の場所と使い方がわかるように表示する。
  - ・倉庫に資機材の一覧表を貼るなど、みんなにわかりやすくしておく。
  - ・資機材操作訓練は毎年やって使える人を増やすことが大切である。
  - ・毎年訓練は必要だが、主体はどこがよいか、みんなが参加できる訓練を検討していく。
  - ・組織をつくるには大きな組織でやったほうがよいのか。
- (3) 近隣の大学等と連携して、学生ボランティアや寮の学生を若い担い手を確保を検討していく。
  - ・若い人の確保。上北沢3～5丁目は学生寮等がない。大学との協定を検討する。
  - ・学生を把握・指示する人が必要。指示するリーダーの育成が必要。
  - ・大学・学校と災害時の協定を結んでいくことを検討していく。

- (4) 地域内の商店街や事業者（工務店・介護事業者等）との協力体制を検討していく。
- ・商店街との協力体制をお願いする。
- (5) 負傷者の応急救護には、医療関係者・病院・診療所等と連携していく。
- ・負傷者はどこに運ぶのか、松沢病院が受け入れてくれるのか。災害時に、松沢病院への負傷者の受け入れを協議していく。
  - ・医療救護所である芦花中、烏山小まで運ぶ。医療救護所まで運ぶのは大変  
→松沢病院や近隣の診療所と協力協定を検討していく。

### 課題3 被害状況の把握・報告

#### ■意見

- ・食事中だったらどうしよう？
- ・冬の18時⇒ガス、電気、水道をフルに使っている時間帯  
⇒使えないと、暗い、寒い⇒パニック
- ・食事の支度による火の使用中である。
- ・火災が発生する。
- ・家具の転倒や転ぶことによる打撲等がある。
- ・物の落下・寒さ・暗い。
- ・寒くて体調不良になる人が現われる。
- ・真っ暗で皆パニック状態になる。
- ・出口の確保が出来るかどうか。
- ・扉を開放する。
- ・テレビも携帯も使えず、情報が乱れる。
- ・携帯が使えない。
- ・家族の安否確認をどうするか。
- ・先ず自分が行動し、家族の安否を確認する。

#### ■地区としての今後の取り組みの方向性

- (1) 調理中の火災予防のため、台所から火を出さない工夫を行っていく。
- ・台所に消火器を設置する。
  - ・自動的にガスは止まる。揺れの方向によっては止まらない。動けるなら自分で火を消す。
  - ・停電時は、復旧した際の火災を防止するため、ブレーカーを落とす。
  - ・緊急地震速報などに反応して、油の入った鍋はシンクなど安全な場所に移す。
  - ・近くにいるなら火を止める。調理中火の前から離れない。
  - ・IHなら停電や鍋が離れれば、熱は止まる。
  - ・自分の家からは極力火をださない。極力火を消しに行く。(マイコンメーターを信用しすぎない)
- (2) 家具の転倒落下によるケガや火災の発生を防ぐため、家具の転倒防止に取り組んでいく。
- ・食器棚は、力を入れないと開かないように、食器棚に牛乳パックをはさむ。

- ・食器棚のつまみ部分にゴムを8の字でかける・金具を引っ掛けるなど工夫する。
- ・食器を割れないものに変えていく。
- ・つっぱり棒、ストッパー、家具と天井の間にダンボールを入れる（空間をなくす）。
- ・転倒防止も100パーセントではないので、上までものを積み上げない。
- ・ガラス飛散による怪我が多いので、靴を履くことを心がける。底の厚い靴を用意しておく。

(3) 懐中電灯を目に付く所に備えるなど、停電時に対応できるようにしていく。

- ・ブザー付ライトの活用。携帯電話の活用。折ると光るもの。
- ・懐中電灯は、ソーラー型や防犯ブザー付のものなどを備える。
- ・太陽光電池のもの（3時間はもつ）。
- ・定期的に電池の使用・未使用の区別をする。
- ・壁に非常灯を用意する。
- ・ライトが点灯するか確認。あちこちに懐中電灯を設置しておく。

(4) 災害伝言用伝言ダイヤルや災害用伝言版の活用など、各家族で安否の確認方法を決めておくことを啓発していく。

- ・両隣の家を確認する。両隣の家にいざという時に助け合える関係作りをする。
- ・避難しているとわかる目印を。子供は学校にいれば面倒見てもらえる。
- ・家族で約束事を決めておく。家族がばらばらの時の連絡手段。
- ・行く避難所をあらかじめ決めておく。外にいる時→自宅に戻る。
- ・決めた約束事を思い出せるようにしておく。町会で使用訓練をする。
- ・地域で防災の準備をチェックする日を決める。
- ・両隣と連携（安否確認）する
- ・家族の居場所がわかるように各家庭でのルールを作っておく。

#### 課題4 要援護者の避難支援

##### ■意見

- ・災害時要援護者協定を全町会自治会で締結している。
- ・要援護者は町会である程度把握している。名簿登録者は何とか助けられる。
- ・災害時要支援者のサポート体制が立ち上がった。
- ・高齢者の数が多い。
- ・福祉避難所となる特養老人ホーム高齢者施設が地域内にある。
- ・応急措置で間に合わなかった怪我人、病人はどうするのか？
- ・非常事態で、体調不良の人が増えていく。
- ・要援護者は多い。

##### ■地区としての今後の取り組みの方向性

(1) 災害時要援護者の協定にもとづき、具体的な支援を検討していく。

- ・要援護者が求めていることと、支援者との気持ちにギャップがある。
- ・過度な期待をされすぎている。

- ・見守りをする人は自分で助けるのではなく、助けを呼ぶなどの役割を担えばよい。
  - ・支援者本人が助けるのは困難。
  - ・手伝ってくれる方に要援護者の住所を教えてよいのか。
  - ・災害時どのような場合に要援護者のところに行くのか決まっていない。
  - ・要援護者の連れ出し方法について、二人でも運べる方法など検討していく。
- (2) 町会・自治会、民生委員含めて、災害時に協力を得られるよう幅広い協力者・支援者の確保に向けた取り組みを検討していく。
- ・中学生にも上から目線ではなくお願いすることが大切。
  - ・芦花中生など若い力をいかに活用していくかが大切。
  - ・2人で運べるイスを自治会で購入した、おんぶひもを活用できる。
  - ・隣近所の関係を充実することが大切、町会・自治会の加入を促す。
  - ・行政からもアプローチが必要。
  - ・要援護者と隣近所との関係がない。
  - ・上北沢一丁目には、都営アパートがあり要援護者が多いが、都営アパートは町会に入っていない。
- (3) 平時から要援護者と支援者の見える関係を築いていく。
- ・近所の日ごろからの付き合いが大切。家庭事情や病気もある程度わかる。
  - ・支援者も具体的にどこまで説明していいか不明確。
  - ・要援護者の見守りに行って記録はつけているが、要援護者から担当者への入院、転居、死亡等の連絡がない。
- (4) 地域内の高齢者施設と要援護者支援の連携体制を整えていく。
- (5) 地域の医療機関や診療所等と怪我人や病人の対応を検討していく。
- ・病院は対応できない。避難所運営委員として応急処置はどこまでやればよいか。
  - ・町の医者に防災塾のような場に出てきてもらい、レクチャーしてほしい。
  - ・行政からもアプローチが必要。
  - ・防災塾で地域・病院・看護師と連携していく。
- (6) 普通救命講習会などを受講して、応急手当ができる人材を育成する。
- ・普通救命講習会を行い、救命講習の受講者を増やす。

#### 4. 上北沢地区のその他の課題

##### 課題5 安否の確認

###### ■意見

- ・マンションには町会に入っている人がいない。
- ・単身者用マンションに拡げるのは難しい。
- ・オートロックのマンションの住民との接点がない。
- ・PTAは、町会の会員ではない。

## 課題6 他団体や組織との調整

### ■意見

- ・町会自治会等の一時集合場所(公園)等に行く。
- ・小学校の避難所に行って手伝いたいが、自分たちの子ども達が元気なら良いが、ダメな場合はどうしたら良いか？

## 課題7 避難所の立上げ

### ■意見

- ・避難所がどこに開設されるか知らない人がいる。
- ・若い人たちが自治会活動に関心が薄い。
- ・在宅避難者避難所との連携がとれていない。
- ・避難所運営委員が日頃より準備、訓練をしている。

## 課題8 給食、給水の調達

### ■意見

- ・新しい住民が多く、いろいろなことを(避難所)知らない人が多い。
- ・給水車が来ても水の運搬が困難⇒アパートの高層階など。
- ・使える井戸を把握している。

## 課題9 必要な物資の把握、調達

### ■意見

- ・自宅避難者の把握、声をどのように集めるか。
- ・備蓄品の数が少ない。
- ・避難所に防災倉庫がある。
- ・防災倉庫には町内会にあるD級ポンプがある。